

## 「福島、その先の環境へ。」

福島県立ふたば未来学園中学・2年 <sup>アベ</sup>阿部 <sup>カズハ</sup>一葉

まもなく平成23年3月11日の東日本大震災から10年が経とうとしています。

地震が起きた時、私は4歳でした。立てないほどの揺れが起き、付近では物が落ちていたり地面が割れたりしていましたが、自宅に大きな被害はなく、そのため、停電や断水があったことをおぼろげながら覚えている程度です。私にとって東日本大震災の記憶はそれほど多くなく、地震があった次の日の母の誕生日会が出来なかったことを覚えているというくらい、呑気なものでした。

震災後、両親や大人の会話の中で地震、津波、原発事故や放射線、放射能などの言葉を耳にすることはありましたが、私の生活に影響することなく、地震のことは気にも留めていませんでした。

意識し始めたのは小学4年生の頃です。「コードF」に参加したのがきっかけでした。「コードF」とは、県内各地に仕掛けられた謎解きをするイベントです。誘ってくれた父と共に県内のいろいろなところを回りました。裏磐梯から見える飯豊山、金山町の炭酸水、昭和村の旧喰丸小、棚倉町の城跡、古殿町の越大の桜、相馬市の松川浦など訪れた場所は枚挙に暇がありません。双葉地方にも行きました。そこで目にしたのは、道路脇にある窓が割れた数々の建物と立ち入り禁止のバリケード、時が止まった時計、そしてうず高く積み上げられた黒いフレコンバック。幼かった私はとても衝撃を受けました。

双葉地方について少し調べてみると、東日本大震災と原発事故に伴い約16万人の方々が避難し、現在も約4万人の避難が継続していること、さらに震災による直接的な死者数が県内全体で約1,600人であったのに対して、震災関連死者数は2,300人と直接死より多く、現在も増えており、かつ、そのほとんどが双葉郡であること、震災関連の自殺者が現在もいることなど、東日本大震災は10年前の災害だけでなく、今も継続して続いている

災害であるとわかりました。

双葉地方について調べた時、事故を起こした福島第一原子力発電所が双葉地方に設置されたのは、日本のエネルギー需要があったことと、双葉地域に雇用の場が必要だったことが主な理由だったことを知りました。福島第一原子力発電所の廃炉作業が進められている現在、これに代わるエネルギーが必要だとも思います。

私は新しいエネルギーとして「波力発電」を提案します。福島県は水力、地熱、太陽光、風力など再生可能エネルギーの先進地です。波力発電は波の力で発電します。波力発電は海でしか出来ないのも、福島県のここでしか作れない再生可能エネルギーになると思ったからです。波の力は天候に左右されず、波の力が0という日はほとんどありません。発電量は太陽光発電の約20~30倍、風力発電の約5倍と発電効率が高いのも魅力の一つです。実際、浪江町にある請戸漁港で波力発電所が検討されているそうです。

日本では、原発事故はここ福島で起きたことで、他に例がありません。それは福島の弱みでも強みでもあると思います。あの日津波でたくさんのものを奪われた双葉地方だからこそ、波を資源にし、まだ続いている東日本大震災に終止符を打つべきだと思います。